



TITLE:

「序在書後」説の再検討

AUTHOR(S):

池田, 秀三

CITATION:

池田, 秀三. 「序在書後」説の再検討. 東方學報 2001, 73: 133-155

ISSUE DATE:

2001-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66849>

RIGHT:

「序在書後」説の再検討

池 田 秀 三

一

書物の序文は、古くはその本の末尾に付けられるものであった。^①

右の一事は、中國の古典文獻を取り扱う者なら誰でも知っている初歩的常識である。初歩的常識であるがゆえに、古典の入門講義では必ず教えられることがらであるし、また文獻學の概説書の類でも大概はそのことにふれてある。

そんなわかりきったことを今更のごとく云々するのは面映い次第なのであるが、ただ私には、右の常識についていささか氣掛りな點が残るのである。といっても、常識そのものに異を唱えようというのではもちろんない。常識はもとより誤ってはいない。しかしまた、絶対に正しいというわけでもない。なぜならば、この常識に言及する際には、大抵は冒頭に掲げた一文のごとき言い回しがなされるのであるが、かようなものの言い方は必ずしも十全に正確なものとはいえないからである。そしてそのような表現の正確さ周到さの缺如が、初學者に、あるいは專家に對してさえも、いくばくかの誤

解を與えているのではないか、これがさきに述べた私の氣掛りなのである。

不正確さというのは、具體的には次の二點である。まず第一點は、「古くは」というような言い方はあまりに漠然としていて、いつのころを指すのかが曖昧であるということである。序文が書物の末尾に置かれるのはほぼ漢代に限られる。六朝期以後は、序文は通常、書物のはじめに置かれるようになる（後世でも序文に相當する文章が末尾に置かれることはある。いわゆる「後序」であるが、ただしこれは、「後」とわざわざ斷っていることから、あるいは「跋」「書後」とも稱せられることから知られるように、序が卷頭に置かれるのが普通になってから起ってきたことであり、いま問題にしている序文の位置とは意味合いが異なる）。

第二に、「序文」という汎稱的表現も、嚴密に言えば、正確さを缺く。より正確には、「自序」（この語自體も、後述のごとく、重層的意義を有しているのであるが、ここではとりあえず、自らの著述・編著について撰者自身がその自著の由來について書き記したものの意味で用いる）というべきである。すなわち、六朝期以降はもとより、漢代においても、他者の著した序文（注釋書を含む）は書物のはじめに置かれるのが通常であつたのである。

以上要するに、序文が書物の末尾に置かれるのは、基本的には漢代における自序に限つての話だということである。それを、冒頭の文のように「書物の序文は、古くはその本の末尾に付けられるものであつた」などと一般化して言つてしまうと、誤解を招く恐れがあるのではないか、というのが私の氣にしている點なのである。

もっともこれは、恐らくは私のことさらなる揚足取りなのであつて、冒頭の一文の著者をはじめ、大方の學人は右の事情を先刻承知の上で一般的な物言いをされるだけのことに違いない。とくに第一點は、實例として擧げられる書がほとんど漢代のものに限られていることからしても、實質的には漢代ではと言っているに等しい。たとえば、ある『說文』の概説書には次のようにある。

序文が後についているというのは、司馬遷の『史記』、班固の『漢書』、楊雄の『法言』など、昔の著述の體裁です。

……序だと思って前を見てはいけません。説文の序は第十五篇目、つまり一番おしまいについています^②。

この發言者が、序文が後についている書物として念頭に置いているのが漢代の諸書であることは明らかである。ただ、またしてもことさらに言挙げするようで心苦しいが、「昔の著述の體裁」という言い方は、虚心に讀めば、漢より以前の上代からそういう體裁・形式になっていて、漢代の書もそれに倣った、と考えているように見える。少なくとも文面上は漢代に限定しているとはとれない。とすれば古代一般のことと受け取る讀者がいてもおかしくはないし、實際、私の経験に即していえば、そのような文脈で理解している學生は少なくないのである。

第二點についても、同様に、いや恐らくは第一點にも増して、誤解が生まれているように私には感じられる。また、序文一般のことではなく、自序に限定されると正しく理解されている場合でも、誤って自序なら何でも全て末尾にあったと考えていたりする。たとえば、戸川芳郎氏はその『淮南子』邦譯において、

高誘の『淮南子』の注解は「淮南」鴻烈解」と稱し、その序文が宋本・道藏本とも卷首に冠してある。漢代の體裁として、自序は卷篇の末尾に置かれたもので、いま「敘」を末尾に付した^③。

と注して、高誘序を全書の末に附置している。右の注釋の文自體には何の誤りもない。だが注釋書の自序は、漢代においても、末尾ではなく卷首に冠せられていたのであり、高誘序もその例に漏れない。

以上のことを勘案するに、わかりきったことであるとはいえ、古えの書物では序文はその末尾に置かれていたという常識をいま一度検討し直し、より正確な認識に改めておく必要があるのではなからうか。いま敢えてこの小文を草するのである。結論がかなり先走ってしまったが、以下、そこに至る経緯を説明することとしたい。

本論に入る前にまず「序」とは何かを再確認しておこう。文章の一ジャンル、すなわち文體としての「序」については、明の陳懋仁『文章緣起註』に、

序なる者は作者の意を序づる所以、其の言次第に序有るを謂ふ、故に序と曰ふなり。
とあり、また同じく明の徐師曾『文體明辯』にも、

按ずるに『爾雅』（釋詁）に云ふ、「序は緒なり」と。字亦た敍に作る。言ふところは、其の善く事理を敍し、次第に序づること、絲の緒の若し、となり。又た之を大序と謂ふは、則ち小序に對して言ふなり。

という。すなわち、事理を整然と順序正しく敍述し、作者の意のあるところを發揮するものが序だというのである。

これは明代の序の定義であって、そのまま漢代に適用できるとは斷言できないが、「序は事を（序）次す」るものとは『文心雕龍』論說篇の説くところであり（「序、次也」および「序、緒也」は各種注釋・辭書に見える常訓）、また『史通』序例篇の冒頭に「孔安國云へること有り、序なる者は作者の意を敍づる所以なり、と」とあることよりみれば、時代を超えた序の通念と捉えることは許されてよいであろう。もちろん細かいことをいえば、序に對する考え方は時代によって異なるわけだし、また文體論的にはさらに序・引・題辭・題跋などに細分して論ぜられたりもするのであるが、それらはしよせん瑣事にすぎず、右に見た序の基本的意義を根本から變更するものではない。よってここでは、「作者の意を序づる所以」、すなわち、「自身あるいは他人の著作に對し、どうして作ったかの意圖を（順序正しく）述べるもの」という小川環樹氏の定義を援用させていただき、ここでの序の一應の定義としておきたい。

なおここで、一言注意を喚起しておきたいことがある。それは、序について語る者の念頭には常に『尚書』と『毛詩』

の序（以下、「書序」「詩序」と略稱する）が置かれていたということである。そのことは、劉知幾が孔安國を引き（前引）、それにつづけて、

竊かに以ふに、『書』は典謨を列し、『詩』は比興を含む。若し先づ其の意を敘せずんば、以て曲さに其の情を得難し。

故に篇毎に序有りて、厥の義を敷暢す。（浦起龍『通釋』に云う、「即ち書序・詩小序」。）

と述べていることから容易に察せられよう。陳懋仁が「書序」の作者が孔子か否かを議論しているのは、「書序」が序の代表であつたからだし、徐師曾が「大序」と「小序」に言及しているのも、むろん「詩序」が念頭にあつてのことである。

このように、序について論ずる者は必ず常に「書序」「詩序」のことを意識に上せているのであるが、ことは正面から序を論題とする場合のみには止まらない。序を書くあるいは序に言及するなど、凡そ序に関わる際には、恐らくほとんどの者が同様の意識をもつたであろう。序に関わる文人の大半が「書序」「詩序」を常に念頭に置くのは、というより置かざるを得ないのは、「書序」「詩序」の權威性の故であること、言うまでもない。そして、その權威が作者（に擬せられる）孔子・子夏の神聖性に由來するものであることもまた贅言を要しまい。中でも「書序」は、聖人孔子の作なる故を以て、絶對的ともいえる權威を有していた。かくして、「書序」「詩序」は序の典範として絶大なる權威を保ち、後世の序文を規制しつづけるとともに、多大な影響を與えてきた。序が「作者の意を序づる所以」とされるのは、「書序」「詩序」がまさしくそのようなものであつたからにはかならない。というよりむしろ、「書序」「詩序」がそのようなものであつたればこそ、序の定義がしかく定められたというべきであろう。

以上、蛇足ながら、序における「書序」「詩序」の意義評價がいささか低すぎる感がなくはないので（そこには、『詩經』研究における「詩序」輕視の風潮に對する個人的不滿が混っているかもしれないが）、敢えて附言しておきたい。

さて、さきに私は、序文が書物の末尾に置かれるのはほぼ漢代に限られると述べておいた。以下、その論證に進みたい。ただ、六朝期以降には序文が書物のはじめに置かれるようになったことは、現存の實例に徴すれば一見明らかである。また先達も明言されていることでもあるので、六朝以後の事例の考察は省略に従うこととし、ここでは漢以前に限って考察を進めたい。

序文が書物の末尾に置かれるのは漢代に限られるというのは、それ以前は書物のはじめに置かれたという意味ではまったくない。そもそも戦国末期近くに至るまで、序文などというものの自體、存在しなかったのである。

羅根澤氏がつとに指摘したように、^⑦戦國より前には私家の著作はなかった。私家の著作がない以上、自序のあるはずはない。他者の序は、理窟の上ではあった可能性は存するが、著者を顯彰し著作の意圖を敘述するという序文の性質からみて、實質上、その可能性は皆無に近いと思われる。實際、春秋時代のもものと目される諸書についてみて（ただし私自身は、春秋時代に成立した書物はほとんどないとする疑古的立場をいまなおとっている。ここでのいうのは、一部——いまや大勢？——の學者が春秋時代の書とみなしているとの謂である）、序文の附されていた形迹はまったくない。

戦國期に入ると個人の名を冠した著作が現れてくるようになるが、そのほとんどは弟子ないしは後學が師の言行を記録しまとめたものであったと考えられ、實質的にはやはり私家の著作とみなしがたい。もっとも、撰者に擬せられる人物自身の執筆に係る部分のあることは一概に否定できないし、また、ものによっては、それがかなりの分量にのぼると推定されてもいる。が、全書を一人で書き著したり、あるいは自らの明確な構想のもとに書物を編纂した例はやはり絶無に等しいと斷じるほかない。とすれば、自序の存するわけは依然としてない。

では、他者による序はどうであろうか。いまも述べたごとく、戰國期の成立と想定されている書物の大半は後學の手に成るものである。であるならば、最終編者に當る人物がいたはずであり、したがってその者によって序がしたためられた可能性は十分残っている。しかし、實際の狀況に即してみれば、そのような可能性は實はほとんどないことに容易に氣がつくであろう。というのは、戰國期の著作、とくにその中核を占めるいわゆる先秦諸子書の多くは、戰國末においてもなお後學の論述が積み重ねられていたからである。そのような形成の途上にある、換言すれば、いまだなお定着を見ていない書物に序文のあるいわれはないのである。

かくいえば、あるいは次のような反論が寄せられるかもしれない。すなわち、確かに増補はなおつづけられていたであろうが、それはいわば附録部分の増加であって、本篇に當る部分の基本的骨格（原本と稱してもよからう）はすでに一應できあがっていたものもあるのではないか。そういった本篇部分は一定のまとまりないしは體系性を有していたと考えられるから、序文に相當するものがなかったとは斷定できない。現に『荀子』の堯問篇（とくに最終章）や『莊子』の天下篇は序的性格を有しており、これらはそれぞれの原本の序にあてて著されたものといえるのではないか。そしてそれらがともに書物の末尾に位置しているのは、序文を卷末に置くのが當時のならわしだったからではないか。

右の反論に對する私の再反論は以下のごとくである。

論者のいうとおり、一方で増益がなされているにもかかわらず、本篇部分がほぼ確定していたということは當然あり得る。しかし、それがただちに序ありということにはつながらないし、また實際、その實例も見出せない。『荀子』堯問篇や『莊子』天下篇をそれにあてるのは無理である。確かに兩者は、今本で見える限り、序的性格を有しており、またそれぞれの後序として取り扱われてもいる。だがそれは、序的性格を有するというに止まるのであって、即イコール序ということではない。兩篇はあくまで書中の一篇であって、序として獨立したものではないし、序と名づけられてもいない（ただし、堯

問篇の終章は、押韻している點などからみて獨立性が強く、もともと堯問篇に屬していたかどうかとも問題である。したがって、終章のみを取り出せば、序としての性格はいよいよ強まる。だが、たといそうであったとしても、本來、序として書かれたものかどうかについてはなお強い疑念が残る。

また、兩篇の成立時期はかなり遅い可能性が強く、戰國期の作とは必ずしもいえない。鄙見では、秦漢の際に置くのが妥當と思う。

堯問篇が卷末にあるをもって、戰國期にも序文が末尾にあるの證と爲すに至っては、まったく道理がない。なぜなら、現行本（楊倞本）では確かに堯問篇が最後であるが、劉向校定本では賦篇（第三十二）が後尾であって、堯問篇（第三十）が最後ではない。そもそも劉向が校せしときには、

校讐する所の中『孫卿』書、凡そ三百二十二篇、以て相校し、復重せる二百九十篇を除き、三十二篇を定著す。（敍錄）
という混亂した状態であった。これでは篇の順序は錯踪していたに違いなく、また原本『荀子』が存在していたとも到底考えがたい。劉向によってはじめて『荀子』は秩序を得たのである。

『莊子』についても、事情は似たものであったろう。いや、『莊子』のテキストの定着が西晉の郭象を俟たねばならなかったことを考えると、『荀子』以上に混亂した状態であったことが推測される。したがって、天下篇が末尾に置かれたのはいつか、確實なところはわからない。それどころか、天下篇が本來いまの形のままであったかどうかさえ、かなり疑わしいのである。いずれにせよ、堯問篇と天下篇とをもって、戰國期に序文——少なくとも明確な意識をもって著された——が書物の末尾にあるの證となすことはできないことは明らかである。

しかし、それでもなお、先秦期に序なしと斷定するのは早計という聲は出そうである。というのは、「書序」という厄介な代物がなお残っているからである。「書序」がいつ成立したかは、尙書學上の長らくの懸案で、いまもなお完全な結着は

見ていない。孔子の作というのは現在ではさすがに論外だが、かなり古い時期にまで遡らせる學者は、いまもお結構いる。とくに戰國末期とする説はかなり有力であり、そうした學者は「書序」の體例が漢代の序文のあり方を規制したのだと見ている。^⑧ただし、その説が學界の主流學説となつているとまではいいがたく、「書序」は前漢中期以降の作とする説がそれに拮抗している状況である。私自身はというと、八割がたは漢代制作説に傾いているのだが、戰國末期成立説も完全には捨て去れないといったあやふやな立場である。なぜそうなのかを説明しだすとそれだけで一篇の論文になってしまうので、ここでは割愛するしかないのであるが、客觀的に判斷すれば、漢代制作説のほうが妥當性が高いことは否めない。ここではとりあえず、漢代制作説を支持しておきたい。

關連して問題になるのは『逸周書』の序（今本では書の末尾に附されている）であるが、これについてはこれまであまり考察の對象とされていず、定説のようなものはいまだ出てない。^⑨ただ『逸周書』全體の成立は秦漢の際とするのが大勢であり（ただし、各篇の成立については意見が分れる）、それに従えば、當然、序の制作は漢初以降ということになるが、「書序」より遅れることはまず確實だから、前漢も中期以後にずれこむ可能性が高い。

また「詩序」については、後漢の衛宏の手になるものとするのがほぼ定説化しており、私にも異論はない。なお三家詩の序については定論を見ていないが、私は序のあった可能性は高いとみている（とくに魯詩）。

以上、少し齒切れが悪くて申し譯ないが、積極的に「書序」が先秦期にあったと主張することはできないことは確かである。いずれにしても序について、とくに書物のそれについて確實なことを述べんとすれば、秦漢期の序について語るしかないのである。それでは、その確實な初出例、『呂氏春秋』自序についてみることにしよう。

四

中國文獻史上、初めて自序を具えて出現した書物は、いまもいいごとく、『呂氏春秋』であった。といっても、それは現存の文獻に徴する限りのことであつて、『呂氏春秋』以前に自序ある書物がなかったとは、むろんいいきれない。ただ、前述したような當時の状況からみて、あつたとしてもごくわずかであつたに違ひなく、實質上、『呂氏春秋』を自序つき著作の第一號と認定してもさほどの不可はあるまいと思われる。

さて、『呂氏春秋』の自序にあたるのが、「維秦八年、歲在涪灘」の紀年をもつ「序意篇」である。ただ序意篇には後の漢代の自序のごとき目録は具わつておらず、またテキストにもかなりの亂れがあるようであるから、これを大手を振つて自序と稱するのにはいささかの躊躇を感じないではない。だが、内容的にみて、すなわち「文信侯曰」として

蓋し聞く、古の清世は是れ天地に法る、と。凡そ十二紀なる者は、治亂存亡を紀す所以、壽夭吉凶を知る所以なり。上は之を天に揆り、下は之を地に驗し、中は之を人に審かにす。此くの若くんば、則ち是非・可不可通るる所無し。天には順と曰ふ、順なれば維れ生く。地には固と曰ふ、固なれば維れ寧し。人には信と曰ふ、信なれば維れ聽かる。三者咸當れば、無爲にして行はる。行はるとは、其の數を行ふなり。數を行ふとは、其の理に循ひ、其の私を平らかにするなり。

と、文字どおり、『呂氏春秋』（より正確にいえば「十二紀」）の編纂意圖を序しているという點よりみれば、著述の目的・意圖を説くを第一とする自序の基本要件を備えていることは認めなければならぬ。平心にみて、序意篇を自序のうちに數えることは許されて然るべしと思う。

では、呂不韋は何を以て、自序を書き記すというような従前に例のない破格の舉に出たのであろうか。もとより、その

理由を明確に知悉することはできぬ。が、自らの編纂物に對する絶大な自信がその根底にあることは疑いを容れぬところであろう。そして、その自信ゆえに、自らがいかに高邁な理念を有しているかを君主はもとより、廣く世に知らしめたいという欲求が起ったであろうことも想像に難くない。咸陽の市門に置き、千金をその上に懸けて、「能く一字を増損する者有らば千金を與えん」と豪語したという例の故事は、話自體としてはかなり眉唾という氣がするが、それだけにかえって眞實の一端をうがっている。すなわち、「天地萬物古今の事を備ふ」との滿腔の自信と、自己顯示欲の強い目立ちたがり屋の性格（司馬遷の傳贊に云う、「孔子の所謂聞なる者は其れ呂子か。……邦に在りても必ず聞え、家に在りても必ず聞ゆ」）をまさに彷彿とさせて餘すところがない。かくして、序文にはまた、自撰であれ他撰であれ、著者の顯彰という一要件が加わることになった。

ところで、この序意篇は『呂氏春秋』十二紀なる文獻の末尾に位置している（かかる持って回った言い方をせねばならぬのは、現行の『呂氏春秋』では、序意篇は書物全體の末尾、すなわち六論の後に在るのではなく、先置された十二紀の末に置かれているからである。序意篇の位置、ならびにそれと密接に關連する十二紀・八覽・六論の先後をめぐっては、周知のごとく、多くの異説があり、いまもお定論を見ていない。私自身、その問題については確たる意見を持っていないが、ただ、序意篇が一つのまとまりをもった、換言すれば本來は獨立した十二紀なる一群の著述の自序として書かれたことに疑問の餘地はなく、したがって序文の位置という當面の課題に關しては、『呂氏春秋』全體の成立問題を取りあえず不問に付しておいても支障はない、と考える）。この序意篇の位置については、序文は書物の末尾に置くという通例にそったものと一般にはみられているようである。だが、そう簡單に片づけていいものかどうか、はなはだ疑わしい。と言うのは、さきに考察したごとく、『呂氏春秋』以前に序文をもった書物などほとんど存在しなかったからである。通例も何もあつたものではない。通例を云々するなら、むしろ『呂氏春秋』こそが先例を開いたというべきである。

ならば、呂氏はなぜ自序を書末に置いたかが問題となるが、實のところ、私にもその理由はよくはわからない。が、案

外、特別な理由などはなかったのかもしれない。序意篇が著されたのは十二紀全體ができあがった後のことであることはまず確かなので、その順序どおりに最後に置かれただけのことであった可能性が高い（『淮南子』要略が末尾に附されているのも、多分、同様の事情によるものであろう）⁽¹³⁾。

ともあれ、自序を書末に置くという著述の體例はここに基を奠めた。といっても、どれほどの規範力を有したかは疑わしい。『呂氏春秋』は漢代において決して輕視された書物ではないが、さりとて強い規範性を發揮するほどの高い評價を得た書物でもむろんない。まして序意篇は、自信には溢れているものの、文章自體は短いもので、後世の堂々たる大文の自序に比ぶべくもない。その意味では、序意篇は自序の先蹤というにすぎない。後世の自序に形式・内容ともに大きな影響を与えたという點からいえば、まず第一には『淮南子』要略を擧げるべきであらう。ただ、『淮南子』には明らかに『呂氏春秋』を意識し手本としたところがあり、したがって要略の作者も、序意篇のことは執筆にあたつて念頭にあつたに違いないと思われる。そのことからみれば、序意篇を自序の體例の基を奠めたものと評するのもあながち過當ではあるまい。そして、いま擧げた『淮南子』要略が迹を繼ぎ（ただし、要略を純然たる序として取り扱うことは適當ではない）、さらに司馬遷の「太史公自序」に至って、自序を書末に置くという體例が完全に定着するに至るのである。

五

古えの書物の自序が末尾にあった實例として、「太史公自序」は必ず擧げられるものの一つである。ということとは、司馬遷は通例にのっとつて「太史公自序」を末尾に附した、と一般には考えられていることになる。先述したごとく、それが誤りだということではない。だが、實は、そんな通例があろうとなかろうと、「太史公自序」は末尾に置くほかはな

かったのである。

「太史公自序」は確かに『史記』執筆の動機と、紀・表・書・傳各篇の著述の意圖を表明したものであり、その點では紛れもなき序文である。がしかし、一方でまたそれは自傳、すなわち司馬遷列傳でもあったのである。「太史公自序」が列傳第七十であることから明らかなように、司馬遷は最初から自らを列傳の中に加えているのである。自らのために傳を立てるとすれば、どこに置くかは見やすいことである。最後以外にはあり得まい。そして、かく配置してこそ、上古より當代に至るまでの歴史が完成するのである。司馬遷にとって、「太史公自序」が最後にくるのは、最初からの構想であつたのである。單純に通例に従つただけのことではない。それはまったくの次元の異なることであつたのだ。

だが、一たび「太史公自序」が末尾に配されるや、それは先例となり、強烈な規範力を發揮した。自序は末尾に附する以外になつたのである。その點からみれば、「太史公自序」が通例に従つたというよりも、むしろ「太史公自序」によって通例が成立したというべきであらう。

位置ばかりではない、自序には各篇の意圖・内容を表明する文章、すなわち篇序を含むこと、あるいは自傳を記すことが要求されるようになったのである。班固の『漢書』敘傳がほぼ全面的にそのスタイルを踏襲したほか（ただし、その性格にはかなりの相違がある）、漢代の自序は多かれ少なかれ、「太史公自序」の規制・影響を受けざるを得なかつた。揚雄の『法言』序・許慎の『說文解字』敘・王符の『潜夫論』敘録・『論衡』自紀篇、いずれもその例に漏れない（ただ、篇序と自傳とが一體となつてはじめて自序は意義あるものとなるとする司馬遷の理念は必ずしも繼承されなかつたようで、『法言』『潜夫論』のごとき篇序型と、『論衡』のごとき自傳型—自紀篇には『論衡』の著述意圖はあまり記されていない。それに該當するのはむしろ對作篇である。もっとも、この篇は自紀篇の直前に置かれているので、著述意圖を記した篇は後尾に置くという原則は一應守られているといえる——に分離してしまつたのは惜しいことである）。

後漢の『尚書』のテキストは、各篇序が集成されて一篇をなし、かつ末尾に附されていたという。^⑪「書序」が一篇にまとめられるのが百兩篇以前に遡るかどうかわからないし、そもそも「書序」と『史記』の先後自體が、前述のとおりあやふやなので、斷定的なことはいえないが、私はこれも「太史公自序」の規制力を示すものではないかと考えている。また、漢代、自傳が往々「自序」と稱されるのは（揚雄・馬融・鄭玄らに「自序」のあったことが知られている）、あるいは直接的には司馬相如の「自序」をモデルにしたものかもしれないが、「太史公自序」の名も影響していることは疑えない。

このように、「太史公自序」によって、自序はその位置とスタイルを確立したのだが、後漢もその半ばを過ぎるころから、次第に崩れを見せ始める。それは自序にあらずしてしかも自序と同等の意義を擔った^⑫、いわば自序にあらざる自序とも稱すべき劉向敘錄の出現によるものであった。次に劉向敘錄のもたらした變化について考えてみたい。

六

中國で自著にあらざる書物に對して書かれた序文としては、劉向の敘錄は最も早いもののうちに屬する。最初といえないのは、『逸周書』の序が存するからである。ただ、最も早いものの一つという言い方にもクレームがつくかもしれない。確かにうるさくいえば、いまは知られざる書物に序がついていたかもしれないし、また敘錄以前に「書序」「詩序」が先行して存在した可能性は大であるが、亡んでしまった、あるいは闕落してしまった書物や序についてあれこれ言ってみても始まらないことであるし——また、たといあったとしても、それがごく限られた散發的なものであったことに疑いはない——、一方、「詩序」や「書序」はあくまで一篇一篇の序であって、一定のまとまりをもった一部の書物の序とは同列には論じられない。したがって實質的には、他者の筆になる序は劉向敘錄より始まると認めてよいと思われる。

もっとも、劉向敘録は、周知のとおり、皇帝の命による中秘書の整理・校定作業の報告書として著されたものであって、後世の緣故者による儀禮的序跋とはすこぶる性格を異にしている。劉向は撰者に對する賞賛的美辭は弄せず、むしろ嚴正な客觀的評價を下すことを旨としている（といつても、それはしよせんは儒者劉向の主觀的判定にすぎず、そしてまたそこに敘録の思想的意義もあるのであるが、いまは論じない）。しかし、それらの儀禮的序跋と敘録とは根本的に異質なものであるかといえ、むろんそうではない。というのは、作者の出自・生平を描き、加えてその著作の價值・意義を論評することを敘述の中核に据えるという敘述法において兩者は一致しているからである。そしてその敘述の仕方は、自序においてもまた同様に見られるものであった（自序では、自己評價という形式ではなく、著述の動機・目的の表明として記述されることが普通であろうが、實質的には同一のものとみなしてもよからう）。すなわち、自撰であれ他撰であれ、また稱贊の美辭であるか否かを問わず、傳記的敘述と評價が序文なる文體の不可缺の要素ということであり、そしてかかるスタイルの確立に與つて力あったものが劉向の敘録であつた（劉向敘録の傳記的部分は、『管子』敘録に「太史公曰」と引用があることから知られるように、多くはその材料を『史記』列傳に負っているらしいが、『荀子』敘録のごとく、『史記』の列傳よりはるかに詳細な記事を載せているものもあり、劉向が校書にあたって本文を精讀したばかりでなく、自ら博く資料を涉獵し、力を込めて傳記を作成したことがうかがえる²⁰）。

かように後世の序文に絶大な影響を及ぼした劉向の敘録であるが、ではその叙録の位置は書物の前後いずれにあったのであろうか。以下、その検討に入らねばならぬが、實を言えば、検討とか考察などという大仰な議論を俟つまでもなく、答はまことにあつてなく出る。その答は書前である。

現在、敘録の残っている書物、すなわち『戰國策』『晏子』『荀子』『說苑』『管子』『列子』²¹の諸本は、『荀子』を除いて、ほとんど全て敘録を卷頭に冠している。この事實を素直に受け取れば、敘録は書のはじめにあったとみるのが自然である。例外と見える『荀子』（宋台州本・古逸叢書本）・世德堂本・盧文弨校本等）も、楊倞が

文字煩多を以て、故に舊十二卷三十二篇を分ちて二十卷と爲し、又た『孫卿新書』を改めて『荀子』と爲す。其の篇第も亦た頗る移易有り、類を以て相從はしむと云ふ。（『荀子注序』、宋台州本に據る）

と説明する改篇を行った際、混亂を避けるために劉向敍錄（原文は「中孫卿書錄」に作る）を末尾に移したとみることもできよう。いや、そう考えるほうが妥當と私には思われる。もしか推測することが許されるならば、敍錄の現存する諸書は、本來全てその卷頭に敍錄を附していたことになる。この結果からみれば、敍錄の位置は明々白々で、まことに簡単に結着がつくのである。

しかし、右の結論は、あくまで現行諸本が劉向校定本の原態を基本的に保っているとの假定に立っての話である。もし刊行者が勝手に原本の體裁を變更していたとしたら、當面の問題に絞っていえば、敍錄の位置を動かしていたとすれば、話はまったく違ってくる。果してその疑いはありやなしや。

文獻學の常識からいえば、その嫌疑は完全には否定しきれない。理窟の上では、先の『荀子』の例を逆手にとって、本來書後に置かれた敍錄が前に移されたのだと主張することも、あながち無理とはいえぬかもしれぬ。そして實際、『戰國策』ではそのような序文の隨意な移動が行われたふしがある。黃丕烈「重刻剡川姚氏本戰國策札記」に云う、

（曾子固序）今本は首に在り、鮑本は劉向序錄の下に在り。吳氏（師道）此の序の後に識して云ふ、『國策』劉向校定本、高誘注、曾鞏重校、凡そ漸・建・括蒼本は皆曾の定むる所に據る。剡川姚宏の續校注最も後に出づ。予姚注凡そ兩本を見たり。其の一は冠するに目錄・劉序を以てして、曾序を卷末に置く。其の一は冠するに曾序を以てして、劉序これに次ぐ。蓋し劉氏を先にする者は元本なり、曾氏を先にする者は重校なり」と。丕烈案ずるに、……今本は首に在りとは、影抄梁溪安氏本此くの如し。吳氏の云へるに據りて、姚氏の一本爲るを知る。然れども亦た非、鮑本は尤も誤れり。

劉向序と曾鞏序の配置が異なる本が少なくとも三種、宋代に行われていたことがうかがえる。これでは、現行本の配置にもとづいて原態をあれこれ論じてても無意味といわれても仕方ないとも思える。ただ、劉向敍録のみについて言えば、私はまったく無意味とは考えない。なぜなら、曾序との先後はあれ、各本いずれにおいても卷首に配置されているからである。この配置は、劉向敍録は卷頭に在りという宋代の通念を反映するものではあるまいか。恣意的改編をもって非難の定着している鮑彪本においてもなお劉向敍録を卷頭に列していることからみても、そのような通念の存在は認められて然るべしと思う。もし然りとして可ならば、曾鞏が入手した舊本もまた劉向叙録を卷頭に冠する本であつたとみて不可はない。加えて、同じく曾鞏校定に係る『説苑』の宋本が敍録を卷頭に置いていることがその傍證となろう。

以上で、劉向敍録が書物の卷頭に置かれていたことの證明はほぼなし得たと思うが、それでもなお、本來は末尾に在つたはずのものが、六朝〜唐代にかけて、當時の習慣に従って書前に置き換えられたもの、との反論があるかもしれない。が、これ以上の議論は無駄であろう。劉向校定の原本竹簡でも出てこない限り、絶對的證據のない以上、議論は水掛け論に終るしかないのだから。私としては、絶對的證據のない以上は、今本の體裁を規準として考えるほかはあるまい、と答えるしかない。

ただ、もう一つだけ論據がないではない。その論據というのは『七略』の「輯略」である。「輯略」とは何か、については様々な説が唱えられてきたが、現在では序文、すなわち『漢書』藝文志に見ゆる總序ならびに各類各家の小序の集成とみるのがほぼ定説となっている。つまり、班固が「漢志」を著すにあたって、「輯略」の序文をバラして各々の分類のところに割りつけたというのである。私もまたこの定説を支持するものである。そしてこの「輯略」は『七略』の第一、すなわち先頭に配されている。つまり、序文が『七略』なる書物のはじめに置かれているのである。相似た性格を有する「書序」は、前述のごとく、最後に置かれていたが、それとはまさに對蹠的である。「輯略」をはじめに置いたのには、どれほ

ど明確なものであったかはわからないが、劉歆に序文は前に置くものとの意識が何かしら働いていたのではあるまいか。もしこの想像が当たっているとすると、劉向にも同様の意識が存していたとみることも許されよう。いずれにせよ、「輯略」が第一であるからには、敍録も巻頭とみるのが自然であるように私には思われる。

以上述べたごとく、劉向敍録が末尾にあったと推される證據は皆無に近いのに對して、巻頭にあったことを示唆する證據は、絶對的とは言えぬまでも、いくつか存在している。これをもって劉向敍録は書物の巻頭にありと斷定するに不可はないものと信ずる。

因みに言う、劉向の敍録というと、普通は「護左都水使者光祿大夫臣向言」から「臣向昧死」までの文章を指すが、正式にはその前の目録をも含む。すなわち、まず目録があって、その後に解題の文章がつづく形をとる。目録が前にあることは、『晏子』敍録（『四部叢刊』所收「明活字本」）に

内篇諫上第一凡二十五章

...

外篇不合經術者第八凡十八章

右晏子凡内外八篇總二百十五章

とあることから確かめられる。この形式は『漢書』藝文志にも踏襲され、中國の古典籍の一つの定形となった。^②

七

劉向敍録以降、自序以外の序文は書物のはじめに置かれるのが通例となった。といっても實存の例は少なく、後漢末期

の徐幹『中論』の無名氏序までとぶので、あるいは通例となったとまで断じるのはいかがと思われるかもしれない。が、私があえて通例と稱したのは後漢後期に至ると自序さえも巻頭に冠せられるようになってくるからである。この事態は、自序以外の序が巻頭に配されることが常態化し、その結果、序文は書物のはじめにあるものとの觀念が生じ、それが自序にも波及したとしか考えられない。自序を巻頭に冠した著作として挙げられるのは荀悦『漢紀』と應劭『風俗通義』であるが、この兩書を論ずる前に觸れておかねばならないのが注釋書における序である。というのは、注釋書の序こそ、自序を前に置くという轉換をもたらす決定的契機的作用を果たしたと思われるからである。

注釋というのは、一面では他人の著書のために著すものだが、一面では自らの著述である。この二面性はそのまま序にも反映される。すなわち、一面では他者のための序文だが、一面では自序でもある。したがって巻頭に配するにさほどの心理的抵抗はなく、而して一旦巻頭に置くのが通例となれば、今度は純然たる自序も巻頭に置くことの呼び水となり、その傾向に拍車をかけることとなったものと考えられる。具體的例として挙げられるのは、高誘の『呂氏春秋』と『淮南子』の二注、趙岐の『孟子注』、何休の『公羊經傳解詁』であり、その序（趙岐の序は「孟子題辭」と稱される）はいずれも巻頭に配されている（むろん、これは今本に據って言っているのだが、今本に據ることの妥當性は前説で縷述したので、ここでは繰り返さない。また、前漢の注釋書はどうだったか、氣にする方もあるかもしれないが、前漢における「章句」の類については、序はなかったとみてまず間違いない。そもそも眞の意味での注釋書が成立するのは後漢に入ってからである。因みに言えば、偽古文尚書は巻頭に堂々たる「孔安國序」を登載しているが、そのことによってその偽たることをかえって露呈しているわけである）。

さて、『漢紀』と『風俗通義』であるが、この兩書が巻頭に自序を冠していることは前述したとおりで、これ以後はほぼそのスタイルが定着することからいって、書物の體裁の變遷の歴史上の畫期をなすものであり、その點において特筆されて然るべきものである。不思議なことに、中國文獻學においてそのことに觸れられることは極めて少ないが、兩書の榮譽

のためにここに一言しておきたい。

この兩書は自序を卷頭に置いていること以外にも注目すべき特徴を有している。『漢紀』について言えば、卷末にも序に相當する文章を附していることである。末尾に「侍中悅上」とあり、序でこの文章を「奏記」と呼んでいることからみて、『漢紀』を上る際の上表文であろうが（荀悦は『漢書』のダイジェスト本を作することを命じられていた）、その説くところは、

凡そ『漢紀』は、其の年・本紀・表・志・傳と稱する者は、書家（班固）の本語なり。其の論と稱する者は、臣悦の論ずる所。粗ぼ其の大事を表して、以て得失を參し、以て視聽を廣むるなり。惟れ漢四百二十有六載、皇帝亂を撥めて正に反し、武を統べ文を興し、……命じて國典を立てて、以て群籍に及ぶ。是に於て乃ち作して舊を考へ、通じて體要を連ね、以て『漢紀』を述ぶ。……中興已前、一時の事、明主賢臣、規模法則、得失の機、亦に以て監るに足る。『漢書』百篇を撰して以て往事を綜ぶ。來者も亦に此に監ること有るを庶幾ふ。其の辭に曰く、

茫茫たる上古、繩を結びて治まる。書契爰に作り、典謨云に備はる。……於に赫たる大漢、元功を統辟し、穆穆として惟れ祇む。二祖六宗、明明たる皇帝、洪緒を纂承するも、國の閔凶に遭ひ、荼蓼に困しむ。實に天德を生じ、運に應じて主を建つ。……大建惟れ序し、武功既に列す。乃ち斯文に贊し、禮は前軌を惟ふ。我が小臣に命じて、爰に典籍を著さしめ、以て舊勲を立て、往を統べ來を昭らかにし、永く後昆に監せしむ。侍中悅上。

とあるごとく、内容的にも形式的にも、實質上は序に近い（後半に四字句の韻文を用いたのは常例ともいえるが、ここではやはり『漢書』敘傳の篇序を意識してのことであろう。また「其辭曰」の前の部分は、辭賦における序に相當する）。つまり、『漢紀』はもとと自序を有していたのである。にもかかわらず荀悦は、さらにまた序をしたためたのである（序に「悦遷りて侍中と爲る。其の五年、書成る、乃ち奏記に四百一十六歳と云へるは、書奏する歳を謂ふ」とあるから、序文が奏上後に改めて記されたものであることは明らかである）。では、なぜ改めて序を撰したのであろうか。それはむろん、上表をそのまま序と題するわけにはいかなかったか

らに違いないが、また同時に、彼が右の一文を書物の體例上、本來不可缺の一部分と把えていた、つまり序とはみなしていなかったからではあるまいか。逆にいえば、書物には別途用意した序があつて當然と考えていたことをも示しているのではなからうか。書物には特撰された序があるのが普通、後漢の文藝はついにそこまで進んでいたのである。そしてそれは、後漢末期において碑銘がにわかに興起したこととも通底するものであろう。

『風俗通義』の特色は、全體の序文（總序）のほか各篇に小序（篇序）を有していることである。しかもその篇序は一篇の敍録としてまとめられているのではなく、各篇のはじめに個々に登載されているのである。すなわち、末尾に敍録一篇を置くという舊來の形式は完全に破られているのである。²⁴ もっとも、これは應劭自身のやったことではなく、後人の改編とみることも不可能ではないのであるが、私はいまのところ、應劭自身がこの體裁を用いたものと考えている。もし鄙見にして誤りなかりせば、應劭がなぜそのような體裁の變改をなしたかが問われねばならないが、私は讀者の便宜を考慮してのことだと考える。

後漢の後期は、實は中國文獻史上の重大な轉換期であつた。その轉換とは、それまで單獨で行われていた經と傳、あるいは經と注が合併されたことである。馬融が『周官傳』を著すにあたって、「學者の兩讀を省かんと欲し、故に具さに本文を載せ、經に就きて注を爲し」（『毛詩』大題正義）たこと、鄭玄の『易注』が「學者の尋省の了し易きを欲し」て、「彖象を經に合し」（『三國志・魏書』高貴鄉公紀）たこと、高誘が『淮南子』の注釋をなすに際して「悉く本文を載せ、並びに音讀を擧げ」（『淮南鴻烈解序』）たこと、いずれもその具體的實例であり、何休の『公羊經傳解詁』もその一例に數えられる。このような書物の體裁の變更が試みられたのは、馬融と鄭玄の例からも明らかのように、讀者の便宜を圖つてのことであつた。そしてそのような便宜を考慮せねばならぬ狀況を招いたのは、學問のあり方の變化の故、すなわち少數の徒弟的教育が崩れ、學者層が急激に増大・廣汎化したことである。その廣汎化の一因が紙の普及にあつたことは言うまでもない。²⁵

『風俗通義』の體裁もかかる學問狀況の變化に對應したものであったことに疑問の餘地はないであろう。序文の位置の變化というささやかな小事にも、やはり文化狀況は明確に反映されているのである。

注

- (1) 川合康三『中國の自傳文學』、一九九六、創文社（中國學藝叢書）、一八頁。
- (2) 頼惟勤監修・説文會編『説文入門』、一九八三、大修館書店、四頁。
- (3) 戸川芳郎等譯『淮南子・説苑』、一九七四、平凡社（中國古典文學大系6）、三四〇～一頁。
- (4) 小川環樹・西田太一郎『漢文入門』、一九五七、岩波書店、一五五頁。
- (5) 『文章緣起註』漢書曰、書之所起遠矣、至孔子纂焉、上斷于堯、下訖于秦、凡百篇、而爲之序、按孔安國序尚書、未嘗言孔子作、劉歆亦云、識見淺陋、無所發明、其非孔子所作明甚、顧世代久遠、不可復知。なお「劉歆云」は明らかな誤りで、これは蔡沈『書集傳』の文。劉歆は「書序」を孔子作とみなしていた。
- (6) 注(4)に同じ。
- (7) 羅根澤「戰國前無私家著作說」(『管子探源』、一九三一、所收。後に『古史辨』第四冊、『諸子考索』にも收録) 参照。
- (8) 程元敏『書序通考』(一九九九、臺灣學生書局)は、十三の證を舉げて、「書序」の成立を「周秦之間」と定めている(五八四～五八八頁)。また蔣善國『尚書綜述』(一九八八、上海古籍出版社)も、齊魯の經師によつて秦季に作られたものとみている(ただし氏は、今傳の「百篇書序」は秦季の舊貌を存していないとする。六五～六七頁)。
- (9) 程元敏氏は「書序撰作體製、影響後世序文體製、於漢、直接因襲書序、或間接參酌書序者、約有景帝初年之後所撰之逸周書序、淮南子要略、司馬遷史記太史公自序・表暨彙傳、揚雄法言序、班固漢書叙傳・表・志暨彙傳、及王符潜夫論叙六者。此六家書之序文、所做於書序者、大概有、做書序總繫全書之末、先言一篇作意、後乃言作某篇、一目一序爲常、多目共序爲變、以人名命篇、上下相顧爲文、渾成一大篇也」という(注(8)所掲書、五九二頁)。
- (10) 馬雍『尚書』史記(一九八二、中華書局)は『史記』以降の作とし(二六頁)、また劉起鈞『尚書學史』(一九八九、中華書局)も、張霸が『史記』等より抄録して偽作したものとする(二〇八～九頁)。なお、張霸が「百兩篇尚書」を偽作したのは成帝の時代であるが、劉向の校書よりは前のことと思われる。
- (11) 程元敏氏は「西漢景帝初年以後之人」とする(注(8)所掲書、四二～四九頁)。つとに朱右曾は「此書既爲孔子刪削之餘、不應有序、疑周末史官依放百篇爲之、觀劉向・班固言周書七十一篇、通序爲數、知作序者在向固之先矣」(『逸周書集訓校釋』卷十)と述べている。孔子刪削說に立っているのは誤りだが、「百篇序」に倣つて作つたというのと、劉向以前というのとは正鵠を得ている。
- (12) 安本博「呂不韋」「呂氏春秋」知恵の寶庫(『日原利國編「中國思想史」上』、一九八七、ベリかん社、所收)に、「原形は「八覽」「六論」「十二紀」の順に構成されていたとの推測は、……古代の著作は自序を完成後に書き、最後に附するのを常例とすることから、「序意篇」の位置を問題にする」とある(二一九頁)。
- (13) 金谷治『老莊的世界——淮南子の思想——』(一九五九、平樂寺書店)は「要略篇は、要するに、與えられたものとしての二十篇を前にして、それらを統一的に理解する立場を提供するために、最もおかれて著作され附録されたものである」という(九九頁)。
- (14) 注(1)所掲の川合氏著書を参照(二六～七頁)。
- (15) 宋咸『重廣註揚子法言』序に、「觀夫詩書、小序並冠諸篇之前、蓋所以見作者之意也、法言每篇之序、皆子雲親旨、反列於卷末、甚非聖賢之法、今升之於章首、取合經義」とあり、宋咸以前の本では、李軌注のように、序が末尾にあったことが知られる。

- (16) 自傳型自序については、注(1)所掲の川合氏著書に詳論がある。
- (17) 『經典釋文』尚書・舜典に、「馬鄭之徒、百篇之序、總爲一卷」と見える。孔壁古文にも序一篇があった可能性はあり(王先謙説)、また今文でも「書序」一篇が末尾にありしことが熹平石經の殘石よりうかがえる。なお「詩序」についても、王引之は別に一卷を爲していたとみている(『經義述聞』)。
- (18) 趙翼『陔餘叢考』卷三二「序」に「何休・杜預之序左氏・公羊、乃傳經者之自爲序也、史遷・班固之序傳、乃作史者之自爲序也、劉向之敍錄諸書、乃校書者之自爲序也」という。
- (19) 序が傳記的記事を備えていることについては、余嘉錫「書儀顧堂題跋後」(『余嘉錫論學雜著』一九六三、中華書局、所收)および同「目錄學發微」(一九七四、藝文印書館)を参照。
- (20) 劉向敍錄の傳記部分の資料、執筆態度についても、前注所掲の余氏論文および著書を参照。
- (21) 『列子』は、周知のごとく、僞作の疑いが濃い、敍錄自体は僞撰ではないと思われるので、いまは列の中に入れておく。他に『韓非子』にも敍錄があるが、これは不全であり、また劉向の眞筆かどうか怪しい点もあるので、いまは取り上げない。
- (22) 小川環樹氏は「漢代以前の古書では目錄が最後に置かれたが、その目錄の後にある序を「後叙」とよぶ」と述べている(注(4)所掲書、一五五頁)。ただし張舜徽「鄭氏校讐學發微」(『鄭學叢書』、一九八四、齊魯書社、所收)が「蓋古書自漢以前、多無篇目、或有之而次第彼此不同、多少亦異。至向校書時、始條理而論次之。……今傳世之本、篇目次第、皆向所定也」(五二頁)というように、劉向校書以前に目錄を備えていた書物は稀であつたと思われる。
- (23) 兩書以外に自序を前に置くものになお「釋名」があるが、その序文は極めて短く、また誤脱があるらしくてよく讀めない、いまは注記するに止める。
- (24) 各篇の冒頭に序を備えた書物の先蹤として『史記』の表・書や『說苑』

があるが、表・書には別に序が用意されており、また『說苑』は「風俗通義」のごとき「故曰某某」というような形式をとっておらず、なお序的説明文の段階に止まっている。

- (25) 『風俗通義』原本の卷數に關しては、三十卷(新舊「唐志」)と三十一卷(「隋志」・「意林」)兩様の記載があり、どちらが正しいか、決着を見ていない。もし三十一卷が正しいとすれば、原本に敍錄一卷があつた可能性が強まる(つまり、本篇三十卷に敍錄一卷を加えて三十一)。しかし、「隋志」には「錄一卷、梁三十卷」とあることから、吳樹平『風俗通義』雜考(『文史』七、一九七九)や夏竦『風俗通義』小考(『文史』一〇、一九八〇)は、本篇三十卷で別行の「錄」(吳氏は序とするが、夏氏が批判するように目錄とすべきであろう)一卷を加えて三十一卷とみている。いまのところ私も吳・夏兩氏の見解に同じで、したがって、原本には篇序を輯めた敍錄はなかつたと考えている。ただ、三十卷だからといって、敍錄がなかつたとはいえないし、また『日本國見在書目』には三十二卷に作るから、三十一卷説も完全に成立しないわけではない。
- (26) 紙の發明・普及が後漢の學術に與えた影響については、清水茂「紙の發明と後漢の學風」(『東方學』七九、一九九〇)のち『中國目錄學』に收録)を参照。

附記 本稿執筆中、嘉瀬達男氏より同氏著の「秦漢期の序と著作のあり方」(『樟蔭女子短期大學紀要』「文化研究」十三、一九九八)・「序からみた秦漢期の著作」(『學林』三一、一九九九)を惠送いただいた。兩論とも秦漢期の序の特色を種々の側面から考察した論考で、大いに啓發を受けたが、いかんせん原稿の仕上げの段階に入っていたので、十分に生かせなかった。讀者には併せ參看されんことを希望する。

本研究は、共同研究「文獻と情報」(班長 勝村哲也)の報告である。